
はじめに

医学部の入試で受験生を悩ますのは、英語や理数系を中心とした教科の学力をいかに上げていくかという受験勉強の中心課題に加えて、多くの大学で小論文と面接が課され、そちらの準備と対策も欠かすことができないという点だろう。とりわけ小論文は、高校までの正規教科にはなく、そもそもどのような形式と内容の試験で、そこでどのような学力が試され、どのように評価されるのか、ほとんどの受験生は医学部の小論文のイメージすらまともにつかめていないというのが現状である。

本書は、そうした受験生の現状を前提に、医学部の小論文とはどのような試験か、その基本的な情報を提供するとともに、入試で頻出のテーマと問題形式に合わせた10題の演習問題を課し、その実践を通して、医学部合格レベルまで小論文の学力を上げることを企図している。

医学部の小論文試験は、はっきり言って易しくない。教科の学力とは別に、受験生一人ひとりの知的能力と人間性を試す適性試験だからである。けっして付け焼き刃で対応できるような試験ではない。しかも、その適性として求められるのが、高校までで教わったこともないような医療問題に関する理解と考察だったり、最先端の英文の医学論文や科学論文の読解だったりする。現代の医療課題に対する問題関心やグローバルな情報処理能力が身に付いていないと、まったく太刀打ちができない試験なのである。

本書は、こうした医学部の小論文試験に、真正面から取り組むという戦略をとる。

小論文試験でのポイントは、〈読んで、考えて、書く〉という基本動作をどれだけ忠実かつ厳密に実行できるかにある。そのためには、演習問題にチャレンジして答案を作成する過程で、課題文の読解、設問への応答、論述の展開、文章の構成といった小論文の基本課題をどれだけ自覚的に遂行できるかが重要である。

本書では、その実践を手厚くサポートするために、すべての演習問題に、背景となる知識を提供するテーマ解説、課題文の趣旨を解説する課題文解説、設問の意図や解答の方向性を説明する設問解説、そしてそれに沿った解答例と採点基準を付してある。なかでも特徴的なのは、他に類例を見ない詳細なテーマ解説、課題文解説、設問解説である。やや分量が多いと感じられるかもしれないが、各テーマに関する知識を深め、課題文の読解や設問応答の精度を高めて、答案の質を向上させるためには必要不可欠な情報量と考えてのことである。また、すべての設問に解答例と採点基準を明示してある点も特徴である。答案作成の留意点と評価基準は連動している。採点基準に照らして自分の答案を自己採点することで、自分が気付かなかった点、考察が不十分だった点が理解できるようになる。それが答案の質を高めることにつながるからである。

結果として、本書は、かなり本格的で重厚な小論文問題集になっている。それはひとえに、医学部の小論文試験がそれだけ本格的で重厚な試験だからである。しかし同時に、本書の重厚さは、小論文問題集としての実戦的な性格を保証するものでもある。本書の解説を熟読し、演習問題に挑戦することで、小論文の学力は確実に向上する。

医師への道、医学への道程は、やはり平坦ではないのである。

本書の使い方

本書は、以下の2章で構成されている。

第1章 医学部の小論文の基礎知識編

第2章 演習問題編

このうち第1章は、医学部の小論文に関するガイダンス編である。(1)小論文試験で何が試されているのか、その基本的な趣旨と出題の形式や内容、(2)答案作成に際して意識すべき基本課題と答案の評価基準、(3)例題解説を通した答案作成の手順と採点基準の構成など、第2章の演習問題編にチャレンジするための予備知識を提供する基礎知識編なので、面倒臭がらずに、一通り目を通して、その内容を理解しておいてほしい。また、付録の「医療の世界」は、医療の全体像を概観する見取り図なので、これも是非活用してもらいたい。

第2章は、医学部の小論文入試で頻出する医療テーマを中心に、10題の演習問題を掲載した演習問題編である。医療テーマを扱った日本語課題文の問題7題と英文の問題2題、そして人文的なテーマを扱った日本語課題文の問題1題で構成されている。

演習問題に挑戦する順番は自由である。ただし、全体の配置は、医療の原理的な問題(1~3)から各論的なテーマ(4~6、9)、先端医療技術に関する問題(7、8)、人文的テーマ(10)という構成になっており、医療テーマに関しては、いちおう問題番号通りに解き進めるのが定石である。また10は系統が異なるので、いつチャレンジしても構わない。

それぞれの演習問題を解く場合、①いきなり課題文を読んで答案作成に挑戦してもよいが、予備知識なしに課題文の趣旨や設問の意図を理解するのは困難と思われるので、まず②テーマ解説を読んでテーマ理解を深めてから、課題文を読んで答案作成を始める、あるいは、③課題文を読んだ後に、さらに課題文解説や設問解説に目を通し、課題文の趣旨や設問の意図を理解した上で答案を作成する、といった手順の方がよいだろう。また、いずれの場合でも、作成した答案を、解答例と比較しながら、採点基準に沿って自己採点し、テーマ理解や考察の不十分だった点をチェックして、反省につなげることが大切である(解答例はすべて1行25字で指定字数に収まるようにしてある)。

① [演習問題→答案作成] → テーマ解説以下の熟読+自己採点(解答例・採点基準)

② テーマ解説 → [演習問題→答案作成] → 課題文解説以下の熟読+自己採点

③ テーマ解説 → [演習問題] → 課題文解説・設問解説 → [答案作成] → 自己採点

なお、医療テーマに関してさらに詳しい解説がほしい場合は、医学部受験生向けの参考書である『医学・医療概説 [改訂版]』(河合出版)もお薦めである。

目次

第1章 医学部の小論文の基礎知識編

1	医学部の小論文について	8
2	小論文の基本課題と評価	12
3	例題解説	14
付録	医療の世界	18

第2章 演習問題編

1	医療の倫理と人間の尊厳	22
2	全人的医療（サイエンスとアート）	34
3	インフォームド・コンセントと共同決定	44
4	生活習慣病対策	54
5	ターミナルケア	66
6	認知症	78
7	生殖医療の倫理	90
8	遺伝子検査と予防医療	100
9	気候変動と健康	114
10	学ぶことの意味	128
コラム1	SOLとQOL	33
コラム2	患者の権利保障の歴史	53

1 医学部の小論文について

(1) 医学部の小論文とは何か

医学部は、小論文試験で受験生のどのような能力を測ろうとしているのだろうか。医学部入試における小論文試験の位置づけと、そこで何が問われているのかを簡単に解説しよう。

医学部の入試は、国公立大学、私立大学を通じて、おおむね、センター試験(共通試験)、2次試験、小論文試験、面接試験の4つの試験で構成されている。

このうち、センター試験(共通試験)と2次試験は、教科の学力を試す試験である。この教科の学力が、大学が期待する一定の水準に満たなければ、まず医学部の合格はおぼつかない。教科の学力は医学部合格のための必要条件である。



では、小論文や面接では何が問われているのか。

ここで問われているのは、簡単に言えば、医師にふさわしい資質、つまり医師の適性である。教科の学力を必要条件とした上で、さらに受験生が将来医師として活躍するのにふさわしい資質、適性を持っているかどうかを、小論文と面接で試すのである。そ

ここで問われる医師の適性は、医学部合格のための十分条件にはかならない。

さて、それでは医師の適性とは何か。これは、大きく分けて、インテリジェンス(知的能力)とヒューマニティ(人間性)の2つで構成されている。

インテリジェンスは、医学部受験生であれば身につけていることが期待される医療に関する基本的な知識と問題関心を十分に備えているか、その知識を論理的に理解し、自分の問題関心に沿って論理的に思考し、相手に伝わるように論理的に発信できるか、という知的な能力である。



ヒューマニティは、将来、臨床の場面で、患者が抱える苦痛に対して適切に共感ができる共感力を備えているか、その共感に基づいて患者の話に真摯に耳を傾けられるようなコミュニケーション能力を備えているか、という人間的な幅と奥行きを意味している。

この2つは、医師の適性を構成する両輪であり、どちらも欠くことができない。医師たるも

の、クールな頭脳とホットなハートの両方を備えているべきだ、ということである。

(2) 出題の形式

医学部の小論文試験の出題形式は多様だが、それを分類すると、おおよそ以下ようになる。

- ① 課題文読解型Ⅰ
- ② 課題文読解型Ⅱ
- ③ 図表分析型
- ④ テーマ型
- ⑤ 英文問題
- ⑥ 理科論述型

①課題文読解型Ⅰ：日本語の課題文が与えられ、その読解に基づいて、設問で指定されたテーマに関して意見論述を行うもの〔設問単数〕。

②課題文読解型Ⅱ：日本語の課題文が与えられ、その読解に基づいて、文中の論旨の要約や説明、設問で指定されたテーマに関して意見論述を行うもの〔設問複数〕。

③図表分析型：図表（グラフや表）の課題資料が与えられ、その読み取りや設問で指定されたテーマに関して意見論述を行うもの。

④テーマ型：（課題文・課題資料がなく）設問で指定されたテーマに関して意見論述を行うもの。

⑤英文問題：英語の課題文が与えられ、その読解に基づいて、要約や説明、意見論述を行うもの。

⑥理科論述型：理科学的なテーマの課題文が与えられ、その読解に基づいて、計算・分析・説明・推理・考察などを行う、理科（物理・化学・生物）と数学の4教科にまたがる総合問題。

このうち、①②はもっともオーソドックスな出題形式で、国公立大学・私立大学を問わず、出題頻度が高い。③は、独立した問題としては、医学部ではあまり出題されないが、図表分析の要素を含んだ問題（②⑤⑥）はよく出題される。④は、国公立大学では稀で、私立大学でよく出題される形式である。⑤⑥は、主に国公立大学で出題される。私立大学ではほぼ出題されない。

(3) 出題の内容

小論文の出題の内容も多岐にわたるが、その代表的なものを分類すると、おおよそ以下ようになる。やはり医療に関わるテーマが多いが、医療以外のテーマも出題される。

■ 医療に関わるテーマ

医療の原理	「健康」の定義や現代の疾病構造の特徴など医療に関わる基本的な事項をふまえながら、医療とは何かを原理的に問う。
医療者-患者関係	患者の自己決定権やQOL、インフォームド・コンセントなどの概念を軸に、臨床現場における医療スタッフと患者や家族との関係のあり方を問う。
終末期医療	終末期患者のQOLや延命治療と緩和ケアの違い、ホスピスケアや在宅ケアなど、ターミナルケアに関わる基本的な事項を軸に、終末期医療のあり方を問う。
高齢者医療	高齢者に特徴的な疾患（慢性疾患、脳卒中による片麻痺、認知症など）や地域医療、在宅ケアなど、近年需要が高まりつつある高齢者医療のあり方を問う。